「音楽現代」'99年5月号

▼東京ニューシティ管弦楽団

◆東京ニューシティ管弦楽団 第一三回定期演奏会

指揮者・内藤彰によって創立されて早九年、ニューシティ管弦楽団は、第一回の定期演奏会から着実に歩み始め、今回の第一三回を聴くとその演奏力、オーケストラとしてのまとまりに格段の進歩を感ぜずにはいられない。演奏会の多くを内藤が指揮しているためか、内藤の音楽性をダイレクトに伝えると言えるのだろう、今回のプログラムも、お得意のロシア音楽をメインに置いたオーソドックスな選曲に好感が持て、また全力投球の清々しさが印象に残る。

最初の曲目、ブラームス「ハイドンの主題による変奏曲」は率直ですっきりとした表現。淡々とした表現に加えて、もう少し心の動きが欲しいところ。二曲目はシューマンのピアノ協奏曲。九〇年チャイコフスキー・コンクール二位のウラジーミル・ミシュークのピアノは繊細な抒情性にみちた優しい表情が主調。最後のショスタコーヴィチの交響曲第五番が当日の白眉だろう。冷たい音彩を生かした熱演で心に残る演奏だ。（3月21日、北とぴあさくらホール）

（保延裕史）